

（授業の腕をあげる法則 向山洋一 明治図書 教育新書より「第7章 伸びる教師の共通点」）

「伸びる教師」ということについて少し述べてみる。

教師は二十年経験したから「二十年もの技量がある」というものではない。二十年の経験をしても、新卒程度の技量の人もいる（それ以下の人もいる）。

反対に、「さすがにすごい」「と思わせる教師もいる。こういう人は、どうして「さすがにすごい」というまでになったのであるだろうか。

自然に何もしないでそうなったのであるだろうか。そんなことはない。やはり、その人なりに努力を重ねて「さすがにすごい！」と言われるまでになったのである。

そういう教師は、やはりそれなりのすばらしさを持っている。

第一に「全員の子どもを何とかしよう」と考えている。「全員の子どもを何とかしよう」というのは、自分自身の見栄のために、教師がほめられたいからするのではない。逆に、本当に何とかしたいという教師のあたたかさから出ているのである。

だから、「漢字ができない人は毎日残りなさい」というきびしさとは少し違う面を持っている。

何というか、できない子に対して優しいのである。

「全員の子どもを何とかしよう」と思っている。そして、できない子に対して優しい「これが、伸びる教師に見られることである。

ある二年生のクラスに男の子の転入生があった。不思議なことに、書類を持っている。前の学校に問いあわせたら、突然いなくなったのだという。

その子はよく学校を休んでいたらしい。転校してきて、しばらくすると一日、

三日と休み

出した。どうしたらいいか相談を受けた。

私は「転校書類」をはつきりさせることと、どうして休むのか理解することが大切だと言った。

次の日、その子の担任が家庭訪問をして、そのお母さんに学校へ来ていただきたい。子どももしばらくすると、やってきた。私はその子とおしゃべりをした。

その子は、家の事情で五歳の妹と施設に預けられていた。最近やっと母親と三人でくらすことになった。

ところが、母親は夜になると仕事に出かけるのである。帰りは夜中の二時になるときもあるという。

私はその子としゃべった。

「そうか、学校にいくとお母さんと一緒にいる時がなくなっちゃうんだな」
その子は「うん」とこたえた。だから、学校に來ないでコタツに入ってテレビ
を見ている

のである。母親は「学校に行きなさい」というらしい。

登校拒否をくりかえす「めんどうな子」という言い方もあろう。

しかし、わずか小学校二年生の身で、小さい妹と二人施設に預けられ、やっ
と母親と一緒に住めたのである。

それなのに、学校に來てしまえば、母親と一緒にいる時間が無くなるのだ。
「それでも学校に來い。それほど学校は大切だ」という自信は私にはない。
いや「この子には、母親のぬくもりこそが一番大切なのだ」と言える。

「学校に來なさい」という面だけから考えたって、解決はできない。
この子のつらさを、いとおしいまでの淋しさを理解するのだから、教育は
できない。

このままでいいということではない。何とかしてはならない。しかし、そ
れは、この子の身の上を、わがことのように理解してからののである。

「全員を出来るようにさせる」ということを何かきびしく、スパルタ式にしこ
くことだと考えている人がいる。

私は、そんなことには反対だ。教室には、いろんな子どもがいる。人それぞ
れである。

だから人生がすばらしいのと同様に、教室もすばらしい。

「それぞれの子どもに応じて、出来るようにさせる」のであり、「出来ない子
への優しさ」の上でできるようにさせるのである。

だから、教師は、いろいろな方法・技術を持っていないと対応しきれないとも
いえる。

次に伸びる教師は、前述したことの裏返しだが、仕事の責任を回避しない人
である。

「子どもがさわぐ」「子どもができない」「ということの原因を、まず自分自身の
問題として考える人である。

「子どもがさわぐ」「子どもができない」原因を、他に求める人がいる。

親が悪い。家庭が悪い。地域が悪い。前の担任が悪い。教科書が悪い。学校が
悪い。

理由はいろいろあるが、このように、まず他のことに原因を求める人がいる。

それも、担任になりたてのころならまだしも、一カ月も二カ月も担任をしていながらこのように言う人がいる。

「子どもがさわぐ」のは、その人が悪いからである。力量のある教師が教えれば、子どもはすぐに静かになる。授業に熱中するようになる。

「子どもがさわぐ」のは、つまり「授業に熱中しない」のは、その教師の力量が低いからである。

他にも原因があるかもしれないが、九〇パーセントは、教師の責任なのである。それを、他に責任転嫁をする教師がいる。情ないことだ。自分の仕事の責任を自分でとるといふ、職業を持っている人間なら、当然心しておかなければならないしなみがないのである。

こういふ教師は伸びるはずがない。

「自分の欠点」を自覚せず、責任の転嫁をして、他を責めているのだから伸びるはずがない。

「自分のせいだ」と思う教師なら、どこが悪いのかと謙虚に考える。工夫もするし研究もする。

そういう人の所へは情報も集まっていく。

こうして、伸びる人はますます伸びる。反対に、他に責任転嫁をしている教師は、何十年教師をやっているとママの腕しか持っていないのである。

注意深く、教師の話に耳を傾けるといい。

「すばらしいな」「すごいな」と思う教師は、決して「できないこと」「を子どもに責任にはしない。いつも工夫を加えている。

それに反して、力量のない教師ほど、「子どもの責任」にしてしまう。

伸びる教師は、教師の仕事の恐ろしさと自覚している。自分が二年間も三年間も教えてしまっていていいのだろうか、と絶えず反省している。「子どもができない」ことを、自分自身の責任として考えていく潔さ、責任感、謙虚さを持っている。

次に伸びる教師の特徴は「すなお」であるといふことである。

これは「自己主張がない」ということとはちがう。また「ヒラメの教師」のように権威に対してペコペコしているというのとはちがう。しかしどんな人間の言うことにも耳を傾け、吸収していく力があるといふことである。

「すなお」な人には、周りの人がいろいろと言ってくれる。

「良かった」ときは「良かった」と言ってくれるし「悪かった」ときは、誰かがそれとなくたしなめてくれる。

こうやって、いつの間にか成長していく。

これは、いかなるプロの修業でも共通らしい。相撲でもプロ野球でも将棋でも歌手でも、プロを育てるのには、その道で天分がある人に目をつける。

しかし、「少々天分があつてひねくれている人」より、「天分は劣るがすなおな人」の方を選択する。これは、どんな道といえど絶対の条件と思う。

それは「素直な人」の方が、どんどん吸収して伸びていくからである。

他人の意見を受け入れる懐の広さがあるからである。少々天分のある人の伸びなど比較にならない。

「素直な人」は「ひねくれている人」にくらべて、人間的な魅力がある。しかし、大事なものは、それだけではない。「素直な人」の方が、本当に伸びていくのである。

よく「少々研究論文を書いた」「少々実践報告をした」ということぐらいで、天狗になっている人がいる。

しかし、そんなのは見るレベルから見れば大したことではない。どうということもない程度である。

全国には、いくらでもいる。

「すなおである」というのは、他人がいろいろ言うてくれるということである。他人の尊い経験が流れ込んでくるということである。

こんな素晴らしいことはない。

次に伸びる人、それは知的な人である。本をよく読む人である。(後略)